





## 論文審査の結果の要旨

報告番号	博(水・環)甲第76号	氏名	劉 璐
学位審査委員	主査 戸田 清 副査 渡辺 貴史 副査 深見 聡 副査	   	
論文審査の結果の要旨			
<p>劉 璐さんは中国の南京信息工程大学言語文化学部を卒業後、同大学大学院博士前期課程を修了し、修士(学術)の学位を取得した。平成30(2018)年10月に長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科博士後期課程に入学し、現在に至っている。同氏は水産・環境科学総合研究科に入学以降、内藤湖南の日本文化史論についての研究に従事し、研究結果を令和3(2021)年7月に主論文『内藤湖南の日本文化史論について』として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文2編(うち査読論文2編)を付して、博士(学術)の学位を申請した。</p> <p>長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授会は、令和3(2021)年7月21日の定例教授会において論文内容などを検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、ZOOMで公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を令和3(2021)年8月25日の水産・環境科学総合研究科教授会に報告した。</p> <p>主論文の各章の概要は以下の通りである。</p> <p>序章では、研究動機、内藤湖南に関する先行研究、研究方法、各章の概要について述べた。</p> <p>「第1章 日本国民の文化的素質と独立性」では、湖南の文化に関する定義をふまえ、目録学を指標に日本が「文化をもつ国家」であることを示した。湖南によると、和歌、物語、神の国、万世一系の皇室、神道の伝授、文物の保存が日本文化の中心的内容である。ここから「文化国民」という概念を引き出し、国語教育の重要性を強調し、各時代の教科書の編纂を手掛かりに日本の国民文化の成長について説明した。湖南によると、教育は3つの時代に分けられる。前半は公家教育を主とした時代で、後半の最初は中流教育の時代で、最後は庶民教育の時代である。国語教育を通じて国民の文化的要素が形成され、教科書の編纂と使用によって教育が広がり、教育が普及することにより国民の文化的要素ができたとされる。さらに、大坂の町人と学問を背景として、大坂の学問の起源、興起、没落、暗黒時代という4つの時代を対象として</p>			

民衆の文化的要素を探究する。国民の文化的要素の形成は日本文化の独立を明示し、教科書の編纂を通じて日本文化の独立性がわかると思われる。

「第2章 独創的文化論——応仁の乱を巡る論考」では、主に応仁の乱をめぐる湖南の独創的な日本中世文化論を展開する。応仁の乱については下剋上の反乱になった暗黒の時代であるということが日本の歴史学上の一般的な認識であるが、湖南は異なる認識をもっており、応仁の乱は日本の歴史上の画期的な事件で、日本文化が形成されるきっかけだと考えた。湖南によると、今日の日本を知るために日本史を研究するには、古代の歴史を研究する必要はほとんどない。応仁の乱は日本史上において非常に大切な時代であり、日本をまったく新しくしてしまったのである。この時代に足輕という階級が目立つようになって、下剋上というものが出てきたが、それは最下級のものがあらゆる古来の秩序を破壊し、激しい現象を深刻に考え、下の階級からこの時代について考える思想をあらわしたものである。この騒々しい時代であるからこそ、日本人のあいだで初めて自国の歴史を必死に残そうとする意識が生まれた。この認識は湖南の「発想の転換」の所産であった。

「第3章 日本文化の形成・発展論——『日中交渉史』から論ずる」では、主に「日本文化の形成・発展論」をめぐる湖南の日本文化論を展開した。この章では「ニガリ説」および「螺旋循環史観」についての湖南の論述を究明した。「ニガリ説」および「螺旋循環史観」にもとづいて、「日本上古の状態」「日本古代中央集権国家の形成」「天平文化」「平安期の漢文学」という代表的な4つの時期を選んで、日本古代における唐代文化の受容について考察する。最後に、湖南の「時」を経とし、「土」を緯とする時空座標の文化論にもとづいて、日本近世の宋明儒学の受容、儒学の「日本化」および近代の「新学の先駆」をめぐる論述を展開する。

「終章 内藤湖南の独創的な日本文化史論の究明」では、研究の結論と成果、今後の課題について述べた。主に日本国民の文化的素質と独立性・応仁の乱をめぐる論考・日中交渉史という3つの視点から、湖南の文化論・文化影響論・独創的な中世文化論・日中文化交渉史論を考察した。国民性を文化の基本的要素とする文化論には、湖南の文化に関する独創的な考えがある。国民性を文化の基本的要素とすることが湖南の中心的な思想である。国民性についての関心は国民国家の成立に伴う国民のアイデンティティ形成の必要から生じてきた。螺旋循環史観という文化影響論にも、独創性がある。湖南は文化の発展を天体の運行にたとえ、文化全体の発展は三次元空間での文化の継承、融合と発展の過程であると考えていた。応仁の乱を日本文化創出の契機とする中世文化論には、さらに独創性がある。応仁の乱以後の日本では多くの変化が生じてきた。中華文化を日本文化のニガリとする日中文化交渉論では、湖南は、日本文化はもともと豆腐になる素質をもっていたが、これを凝集させるべき力が加わらずにあったので、中国文化はそれを凝集させたニガリのようなものであると独創的に考えた。文化受容の古代、文化が創出される萌芽を示した中世、文化形成の近代という3つの時期を通じて日本文化が

いに形成されたと湖南は考えた。以上が湖南の独創的な日本文化史論である。さらに今後の課題について述べた。

本研究の独自性、新規性は、日本国民の文化的素質と独立性・応仁の乱をめぐる論考・日中交渉史という3つの視点から、内藤湖南の文化論・文化影響論・独創的な中世文化論・日中文化交渉史論を考察し、湖南の独創的な日本文化史論の全体像を総合的に解明したことである。すなわち、国民性を文化の基本的要素とする文化論において、湖南の文化に関する考えには独創性があり、国民性についての関心は国民国家の前身の成立に伴う国民のアイデンティティ形成の必要から生じてきたのである。文化影響論において、湖南は文化の発展を天体の運行することにたとえ、文化全体の発展は三次元空間の文化の継承、融合と発展する過程であると考えていた。応仁の乱を日本文化の創出される契機とする中世文化論において、湖南は他の歴史家と全く違った見解を持っており、応仁の乱以後の長い間の応仁時代というものは今日過ぎ去った後から見るとそういう風ないろいろの重大な関係を日本全体の上に及ぼし、ことに平民実力の興起においてもっとも肝腎な時代で、平民の視点からはもっとも謳歌すべき時代であると考えている。日本文化交渉論において、湖南は日本文化というものは豆腐を作るように、もともと豆腐になる素質を持っていたが、これを凝集させるべき他の力が加わらずにあったので、中国文化はすなわちそれを凝集させたニガリのようなものであると考えている。湖南によると、日本文化の形成には長い時間がかかったのである。文化受容の古代、文化の創出される萌芽の中世、文化形成の近世という三つの時期を通じて日本文化がついに形成される。これは内藤湖南の独創的な日本文化史論であると思われる。

本研究の結果は、内藤湖南の文化史論について、先行研究をふまえて新しい重要な知見を提示したものと評価できる。学位審査委員会は、日本の社会思想史、日本史および日中文化交渉史の分野の発展に貢献するところ大であり、博士(学術)の学位に値するものとして合格と判定した。